都道府県番号	２９
都道府県名	奈良県

（①□　②□　③レ）

Ⅰ．学校名及び規模

御所市立葛小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	障害児学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	3	9	
児童数	１４	３１	２６	２１	２９	３１	5	157	１５

Ⅱ．実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の趣旨）

・主題（テーマ）
「確かな学力」の向上を目指した学習指導の創造
～国語科学習を核とした基礎学力の定着を図る取組を通して～
・テーマ設定の趣旨
もともと“少人数”である本校では、「個に応じた指導」が行いやすいはずにもかかわらず、児童は低学力傾向にある。そこで、基礎学力の定着を図る取組を推進することとした。本校では、特に国語科を核として推進することにした。
国語学力は全ての学力の基礎となるものである。本校ではかねてから言語への関心や理解、言語活動の適正化などが教育課題としてあり、その課題を克服することが基礎学力の定着につながるものと考えて、本主題を設定した。

Ⅲ．実践研究の内容について
（ｉ）研究体制の工夫
本事業を推進するために研究推進委員会を組織して、校内全体研修の運営にあたった。研究テーマや実践方法をこの研究推進委員会で十分論議した上で、全体研修に提案することで、全職員の共通理解が図れる。
また、全職員が「学習構成部」「学習環境部」「教育課程編成部」のいずれかに所属し、本事業にかかわれる体制をつくっている。
「学習構成部」では、確かな学力を付けるための指導や評価の在り方についての研究を進め、「学習環境部」では、学級や学校内に“学びの環境”づくりを進めている。「教育課程編成部」は、新学習指導要領に基づいた特色ある教育活動を展開するための研究を進める。
また、それぞれの部会には低・中・高学年からそれぞれ均等に所属しているので、各学年での実践からの課題を検討し、その成果を実践にフィードバックできるようにしてある。

（ⅱ）実践研究の内容

① 国語科の校内学習研究会を年間６回開催した。各回に講師を招聘し、研修を重ね、国語科についての見識を高めた。今年度は、『子どもが確かな言語感覚を身に付けられる学習活動を展開しよう。』と『評価規準を位置付けた学習を展開しよう。』を校内学習研究会のテーマとして授業研究を実施した。

校内学習研究会当日までに、事前研修会を開き、学習指導案をもとに本時のねらいや流れ、参観の視点、検証すべき事項などを共有した。

また、校内学習研究会で学んだことや考えたことなどを各自がまとめたものを研究通信に掲載して個人の学びを全体で共有できるようにした。

② 「学習構成部」「学習環境部」「教育課程編成部」の３部会による部会別研修を随時開催した。

「学習構成部」では、今年度は、国語科での基礎・基本として漢字の習得を効率的に全校体制で取り組めるようにするため、各学年の配当漢字を使った熟語のフラッシュカードを作成した。これにより、従来は、担任によってばらばらになっていた漢字指導の方法が系統立てて指導できるようになった。

「学習環境部」では、学校内の言語環境を整えるために、各教室はもちろん校内の空きスペースを利用して毎月の詩を掲示したり、発声のレベル図を作成したり、図書室の図書管理や貸し出し手続きをコンピュータ化したりした。

「教育課程編成部」では、年間指導計画表や評価規準表及び評価基準表を作成したり、学力テストの結果の集約と分析をする一方、縦割り班学習「シリウスタイム」を創設した。また、今年度実施した時間割表をもとに授業時数などを点検し、来年度に向けた時間割表の改訂なども進めた。

③ 先進地研修として、京都ノートルダム学院小学校を全職員で訪問し、京都ノートルダム女子大学の梶田叡一学長の講話を聞いた。

（ⅲ）成果と課題

① 学級内はもとより校内の言語環境が整いつつある。また、個に応じた指導の工夫により、児童の学習意欲が高まってきている。

② 評価規準を位置付けた授業を展開することで、教員にも児童にも、学習のゴールがはっきりと見えてくるようになった。このことにより、教員にとっては、指導と評価の一体化が図れるようになってきたし、児童にとっては、「何が分かるようになればいいのか。」とか「自分はどこまで分かっているのか。」などのメタ認知的な自己評価ができるようになってきた。

③ 縦割り班学習を毎週木曜日の業前に実施したところ、わずか１０分間ではあるが、集中して学習する姿勢が見られるようになったり、分からないところがあれば、自分で復習したりする意欲も育ちつつある。

④ 教員の意識改革が進んだことも大きな成果の一つであるといえる。何とかして子どもたちに確かな学力を付けるための力量を付けなければならないということを意識化できたことである。

⑤ 県国語教育研究会が実施している「国語学力診断」では、県平均を下回る学年もあるが、おおむね県平均の水準を示している。

（正答率　%）

	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
本　校	88.6 %	78.8 %	76.6 %	66.6 %	76.6 %	71.9 %
県平均	89.4 %	76.3 %	65.0 %	76.5 %	71.8 %	76.2 %

②　今年度は、国語科に限定したものの、「話す・聞く」「書く」「読む」「言語事項」という領域の限定はしなかった。そこで、各学年の児童の実態に合わせて、第１・２学年は、「話す・聞く」、第３学年は「読む」、第４・５学年は「書く」、第６学年は「読む」をそれぞれ重点的に取り組んだ。それぞれの学年で成果は見られたものの、新たな課題が見つかっている。例えば、漢字の習得率が低いこと、言語事項に関する知識理解が低いことなどである。つまり、本校では、国語科における基礎学力に大きな課題があることが明確となった。そこで、基礎学力について客観的なデータをとる必要があることが明らかになった。

③　国語科の「話す・聞く」「書く」「読む」「言語事項」いずれかの領域に重点を絞った取組を進めて、共通の観点で児童の学力の向上をはかることができる体制をとる必要がある。

（ⅳ）成果の普及方策

平成１５年度中に学校の公式ホームページを公開し、研究成果を普及する予定である。

（ⅴ）その他

少人数指導を２年生と６年生の国語科と算数科で実施し、特に、６年生では、教科ポートフォリオを導入して学習を進めてきた。